

ハックルルトとその『航海記』

辻 田 右 左 男*

Hakluyt and his 'Voyages'

Usao TSUJITA

(1980年9月30日受理)

は じ め に

ハックルルトは、わが国では、まだ、ほとんど知られていない名前である¹⁾。筆者自身もかれの名前だけはかすかに知っていたが、かれが現在に至るまで、地理学の上に大きく、根強い影響力をもつ学者であることを数年前まで明らかにしえなかった。

では Richard Hakluyt (1552-1616) とはいかなる人物であったろうか。かれは、まず、シェクスピアと同時代の、偉大な地理学者の1人であった。つぎに聖職者ハックルルト Hakluyt, Preacher としばしばかれが自署した²⁾ ように、かれは職業的には僧侶であったが、なによりも重要なのは、倦まずたゆまずその一生をかけて、イギリスはじめ近隣諸国の航海文書を収集し、地理学の聖典 Bible ともいうべきみごとな『航海記』を後世に遺したことである。17世紀後半から始まるイギリスの領土的拡大、大植民帝国の建設はこの書物の存在に負うところが多い³⁾。

従来、ハックルルトならびに『航海記』Principal Navigations が、わが国の地理学で不問に付されていたのは、明治中期以後の日本の近代地理学が、まずフンボルト、リッター、ラツェルを生んだドイツに傾斜し、のちブラーシュによって代表されるフランス学派に左祖したことに遠因が求められる。いずれかといえば、イギリスの地理学は地味であり探検地理、商業地理など実用面を重んじ、理論的でないという理由で、わが国ではこれを軽視する風潮があったことは否めない。

たしかに、地理教育の上では、福沢諭吉などの提唱によりイギリスに範を求めた事例も少くはないが⁴⁾、学問としてはイギリスの地理学は敬遠され、当然のこととして、ハックルルトのような地理学の巨匠の姿が見失われ勝ちであった。

筆者はこの小文において、敢えてこの未知の巨人に接近し、シェクスピアの劇作に匹敵するという偉大な業績、散文で書かれたイギリス国民の叙事詩 prose epic of the English Nation と呼ばれる『航海記』の一断面を明らかにしてみたいと思う。

1. ハックルルトとその時代

Richard Hakluyt が生を享けた16世紀中葉は、前世紀末から開始された大航海時代も、最盛期をすぎ、探検時代を終って植民時代に入ろうとしていた。世界の大洋における暗中模索、あるいは試行錯誤的な航行の時代から、数々の冒険や探検の成果の収穫期となって

* 地理学研究室

剩を示しつつあったが、羊毛工業はかなりに繁栄した。ヨーロッパ大陸諸国を市場とするだけで、十分収支相償い、大きいぎせいを払ってまでアメリカやインド、東洋に市場を求める必要はなかった。今日いう英国病が当時においても、イギリス国民に巢喰っていたと見え、悠然と世界の成り行きを見守っていた。More 一家と並び称せられるイギリスの名門 Thorne 家の Robert Thorne などは、イギリス人のアメリカに対する鈍感さに業を煮やし、1530年みずから作製した世界地図(図1)を用いて Henry 8世に進言、人々の注意をアメリカや東洋に向けさせようとしたが、なんの効果もなかった⁹⁾。

ただ、1550年ごろ、イギリスに突如経済的不況が訪れ、ヨーロッパ諸国の政情の不安定な状態も手伝って、羊毛を中心とするイギリスの貿易は脅威を受けた。ここにおいて、はじめて、イギリスは、スペイン人・ポルトガルの勢力圏外にある北米や東洋に新市場を開拓する必要性を痛感した。

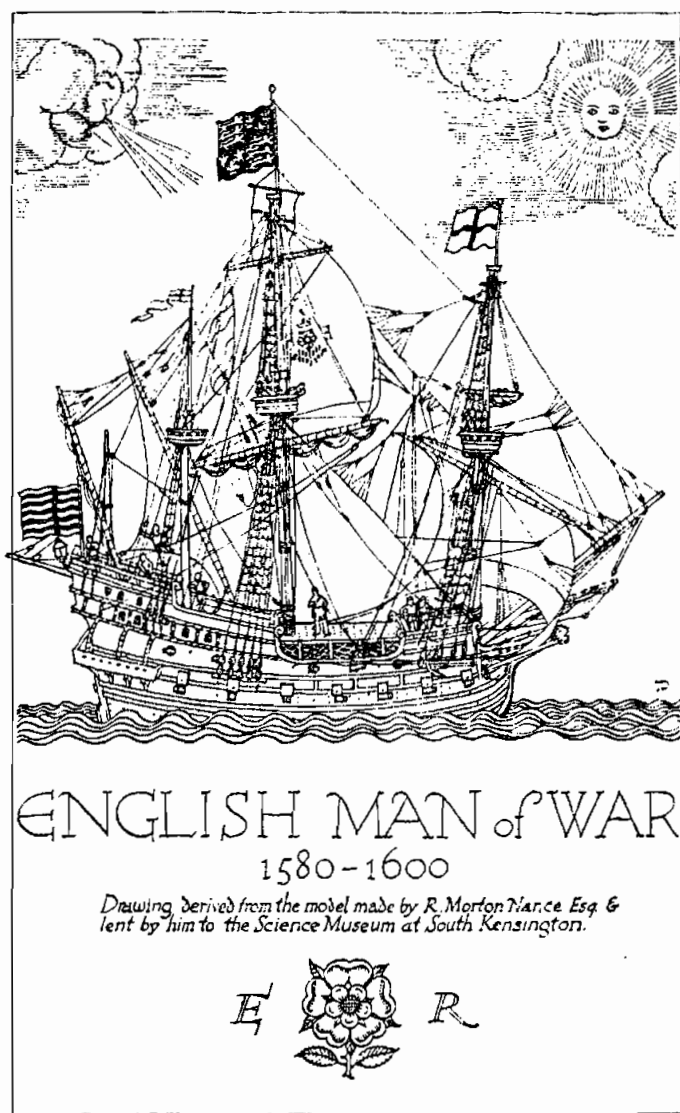


図2. 16世紀末のイギリスの船艦

1552年から3年をかけ、まさしくハックルートの誕生と時を同じうして、北方との新しい貿易を目的とする冒険商人の組合（一名モスコヴォイ商会）が結成され、本腰を入れて新市場の開拓、そのための北極圏経由の東洋接近が画された。折も折、1558年エリザベス女王が即位し、彼女の英断でイギリスの飛躍時代が始まる。しかし、のちに、世界最強と目されたイギリスの海軍の船艦も、当時は女王自身の個人的持舟にすぎず、100トン級の船艦百数十隻というささやかなものであった。1570年代の終りごろ、マゼランに次いで二番目に世界を周航し、Knightの称号を与えられたFransis Drake¹⁰⁾の旗艦The Golden Hind号でさえ、竜骨Keelの長さ僅かに20mというから、エリザベス朝初期のイギリスは船数も少なく、船型は小さく、すぐに世界制覇を夢みるのは無理であった。

ハックルートが生れたのは、エリザベス女王即位の6年前、1552年、そして女王の死(1603)後13年の1616年に没しているから、ハックルートは完全にエリザベス朝の人であった。ロンドンに生れ¹¹⁾、父は皮革商人であったという。ハックルートは5歳のとき父を失い、母もまもなく死去し、5人の弟妹とともに孤児となった。

幸いハックルートの従兄にあたる同名同姓のRichard Hakluytが法律家として自立しており、裕福でもあったので、孤児たちの養育にあたった。この法律家は当時25歳、有能で有名なロンドン商人、船員、学者に知己が多く、Cambridgeの数学者・地理学者John Dee¹²⁾探検家Frobisherも親しい友人の1人だった。後年、地理学者のハックルートが学成り、名をあげたのは、この従兄の庇護によるところが多く、『航海記』の出現はこれら両ハックルートの協力の賜であると、Croneは記している¹³⁾。

従兄の養育下にあったハックルートは、まもなくウェストミンスター寺院内に設けられていた女王直属の学寮Westminster Schoolの生徒となる。これよりさき、1560年即位2年後女王はウェストミンスター寺院を王室付けの教会に指定、そこに数名の司教、僧正を配置した。また将来の聖職者養成の目的で、生徒40名より成る学寮を設立した。そして生徒のうち成績優秀なものは、オックスフォード大学に宮廷の費用で進学させるという規定を設け、生徒たちの勉学を鼓舞した¹⁴⁾。

ハックルートが学寮に入学できたのは、恐らく法律家ハックルートの推せんによるものと思われるが、ハックルート自身も幼小のころから秀才の聞え高く、学寮でも最も勤勉な生徒の1人であったろう。40名中から僅か2～3名えらばれた大学進学組の1人ともなり、かれの大学生生活が始まる。

1570年ハックルートの入学したのは、オックスフォードのChrist Churchの学寮であったが、この学寮が後年Mackinder, Roxbyなどの大地理学者を生み¹⁵⁾、イギリス地理学の中核となることを、当時のハックルートは知る由もなかった。しかし、かれの目はしかと地理学に注がれていた。そのころオックスフォードの各学寮Collegeは、いずれも学生数、100名前後の小規模なものであり¹⁶⁾、必修課目の数も少なく、学生たちはのんびりと、各自が好む学問に専念することができた。ハックルートは将来の必要性を予感して、ここで貪欲にヨーロッパの数か国語を勉強し¹⁷⁾、それを身につけた。英・仏・伊・西・葡各国語のほか、教養語ギリシア語・ラテン語もかれの習得した語学に含まれていたことはもちろんである。

かれがここで目指したのは、観念的、教養的な地理学ではなかった。すでに従兄から啓発されていた北米の開拓、北米に最短距離で達するにはどの航路をとればよいか、どんな船舶を装備し、必要な航海技術をどうして改良するかなど、あくまで実用に即した地理学であった。その線に沿い、ほこりをかぶって図書館の一隅に眠っている既往の航海文書・

探検記録，それらに関連のある書翰類をしらみつぶしに閲読し，筆写していった。

2. 地理学者ハックルルート

ハックルルートのこの学問への執心はいつ芽生えたのであろうか。それは、オックスフォード入学の2年前、従兄のハックルルートから地理的知識の必要性をじゅんじゅんとさとされた時に端を発している。

1589年に出版した『航海記』初版の冒頭、Walsingham 卿に宛てた献辞¹⁸⁾のなかで、ハックルルートは地理学指向に踏み切ったこの歴史的な一日を回想して次のごとく記している。

「私がまだ若かったころ、ウェストミンスター女王の生徒の1人だったころ、従兄のリチャード＝ハックルルートをその居室に訪ねたことがある。そのとき、かれの会議机の上に数冊の世界地理書 *Cosmographie* の本が開かれているのをみつけた。そばに世界地図があった。熱心にその書物を見つめている私を、かれはふしぎそうに見やり、私の無知を啓発してくれた。旧い方法では地球は3つの部分に区切られるが、その後知識が進みもっと多くの大陸の存在することが明らかになった。かれはかれの杖 wand で地図を指し、各大陸の海洋、港湾、海峡、岬、河川、帝国、王国、公国とその領地を示してくれた。そしてそれぞれの大陸で欠乏するものがあると、交通の助けを借り、商人たちの往来によって、ゆたかに補充されることを教えてくれた。

地図類をみせたあと、かれは私を部屋の一隅にある聖書の方へ引っぱり行った。そして詩篇第107篇を開き、その23、24節を指し示した。そこには「舟にて海に浮かび、大洋にて事をいとむ者は、エホバのみわざを見、また淵にてその奇しきみわざを見る」という聖句があった。子どもには難しすぎてそのときは面白いとは思わなかったが、この予言者のことばや、従兄の熱心なすすめは、私に深い印象を与え、私はかたく決意した。もし私が大学に行けるなら、時間も十分あるし、もっと適当な場所で、これらの勉強をつづけ、神様の助けによって、地理学およびこれに関する知識を身につけようと思い立った。こうして研究の門は私の前に開けた。」

地理学への熱情を秘めた青年は、願望通りオックスフォード大学に入り、猛烈な自己修練をする。

1574年学士、同77年修士となり、成績優秀のため、奨学生 Fellowship にえらばれ、大学にとどまった。77年ごろイギリスを訪問したフランドルの地図学者 *Ortelius* と会い¹⁹⁾、その紹介ですこしあと、有名な地図学者 *Mercator* と文通を始めている。このころのオックスフォードの僚友には、オルテリウスのすすめで、イギリス最初の地誌ブリタニア *Britannia* (1586) を書いた *William Camden* もいた²⁰⁾。かれら2人は当時のオックスフォードでも学名が高く、歴史家 *Trevelyan* も、エリザベス女王時代のオックスフォードの4人の秀才として、*Sydney*、*Raleigh*、*カムデン*、ハックルルートをあげている²¹⁾。

このころハックルルートは、永年研修した地理学の成果を僚友の前で披露する機会にめぐまれた。最初の公開講演は、地図に関するものであったが、新旧地図を比較展示して、聴衆の向学心を満足させた。地理学の核心を地図に置いたのは、前記地図学者との交遊がその背景にあったからである。メルカトルと直接面談の機会があったかどうかは明瞭ではないが、メルカトルの息子 *Rumond* は、1569～75年の間、ロンドンに滞在し、ハックルルートはかれと親しい友人関係にあった。とにかく、地図を重視したことは生涯変らず、かれの著作、論文にはたいい地図が副えられていた。

この公開講演後、ハックルルートはオックスフォード大学から正式の教授に任命され、世

界最初の地理学教授の榮譽に輝いた²²⁾。

300年後、同じくオックスフォードの Christ Church 学寮の地理学教授に就任したマッキンダー (1861—1947) は常にハックルートを敬慕し、オックスフォードの地理学の初代教授はハックルートであり、2代目は自分であると語った。そしてオックスフォードの地理学教授は Hakluyt Professor と呼ぶことを提案したが、この案は実現しなかった。

ハックルートが Christ Church で地理学の教壇に立ったことは事実であるけれども、それが一時的なものか、ある期間継続したかは、いま明らかにしえない。また、地理学のいかなる分野について講義を行なったかについても、現段階では適当な資料がない。

しかし、かれは恐らく、視野の広い万能選手的な地理教師であり、地図学・経済地理学・政治地理学・歴史地理学などあらゆる分野にわたって堅実で正鵠をえた講義を行なったものと信じられる。かれの専門中の専門である航海史・航海術についても、しばしば言及したと思われるが、航海術に関しては、みずからの手に負えないことを自識し、オックスフォード大学に、航海術の講座を新設するよう要請している。

さきの法律家ハックルートとの出会いの場面につづいて、かれが『航海記』の献辞のなかで述べている格調の高い文章は、かれの地理学がいかなる性質のものかを判別するなによりの好資料である。かれの、多分、そんなに長くなかった講壇地理学の要約、精髓がこの献辞のなかに凝縮されている。

まず、エリザベス女王の治世以来、イギリスの船舶が世界各海域、諸地域に往来するようになった事実を慶祝し、次のように述べている。

「女王陛下以前のこの国のいかなる王様も、カスピ海の海上にその王旗をひるがえしたでしょうか。どの王様が、女王陛下のように、ペルシアの皇帝と交歓をもちえたでしょうか。そしてその商人に大きく、愛すべき特権を賦与しえたでしょうか。女王の軍隊より以前に、イギリス兵がコンスタンチノーブルの大侯の宮殿の回廊に立つことができたでしょうか。この時代以前にイギリスの大公使が、シリアのトリポリ、アレppo、バビロン、バルサラに姿を見せたことがあったでしょうか。これまで、(インドの)ゴアにイギリス人の姿は見られたでしょうか。またラブラタの大河にイギリス船が碇をおろしたことがありえたでしょうか。かつて航行不能といわれてきたマゼラン海峡をいくども通過し、チリ、ペルーの海岸に沿い、またノヴァ・イスパニアの内陸全域に進出しえたでしょうか。かつて(イギリス以外の)いかなるキリスト教徒が南海の荒波を踏みこえて、ルソン島に上陸したでしょうか。敵意を抱いていたかれらとも友好関係を結び、モルッカやジャワ島との取引も可能になりました。有名な希望岬を二度越えてサンタ・ヘレナ島に到り、イギリスに帰る船腹にはシナの商品がゆたかに積まれておりました²³⁾」。

これに次いで日本のことにもふれ、神がイギリス・日本両国に祝福を下さるようにと願っている。この箇所を見れば、世界の諸地域をいかに vivid に、手に取るごとく知っていたかが察せられる。この献辞の行数の約半分は、歴史地理ともいえる範疇に属し、航海王エンリケの事績を追慕する数行がある。昔、地中海の島国ロードス島が繁栄したことを追想して、同じ島国イギリスにもこれが可能なこと、さらに古代のアテネは海軍を強化せよという神託を受けて国が隆盛に赴いたこと、そして最後に航海文書と取り組むことが自分に課せられた義務であり、ようやくこれを仕上げることができたことと結んでいる。

ハックルートは他の機会に地理学と歴史との関係についても述べ、地図は歴史の目であり、地理学と年代学は太陽と月との関係であるとしている。

経済地理学については羊毛工業、草木染、石油などに深い関心を示し、産業革命に先立

つ百数十年前に、イギリスの羊毛工業の立地条件を先見していたのはさすがである。かれによればイギリスは気候にめぐまれ、一年中河川が枯渇しない上、流速があるので水車を仕掛けるのに適している。イギリス産の羊毛は良質であるし、染料も豊富である。国民の食料に事欠かないし、低賃金の労働力も利用できる。

一時、ハックルルートの地理学の助手をつとめた John Pory がのちに北米に渡り、魚類その他の生物の観察で有名になった²⁴⁾ことを思えば、ハックルルート自身生物地理の素養もあったのではないかと推察できる。

3. 聖職者ハックルルート

少年のころ、Middle Temple の一室で決意した地理学への夢がかない、ハックルルートはいまでは当代随一の地理学者として目されるようになっていた。しかし、幼小のときから、みずからの費用で、ハックルルートウェストミンスター大学の学寮に学ばせ、オックスフォード大学にまで進学させて、イギリスを代表する司祭になることを期待していたエリザベス女王にとっては、地理学という聖職以外の分野でハックルルートが頭角を現わしたことは、俗にいう飼犬に手をかまれたような感があったであろう。女王はあくまでハックルルートに聖職に就くことを要望したに違いない。

もともとかれはウェストミンスター時代からオックスフォード在学中も、キリスト教神学を中心として勉学をつづけてきたのであり、聖職 duty に就くことが宿命であることを、ハックルルート自身よく知っていた。たまたま地理学教授という思わぬ地位がころがりこんできたが、女王の意志に反してそれに固執するつもりはなかった。地理学者として他ともに認められ始めた1580年代の早い時期にかれは聖職に復帰することを宣言した。もちろん、僧服を着ても、余技として地理学の研修に割く時間に事欠かないことは計算に入っていた。

当時のイギリスは、東洋との貿易路を開くため、ヨーロッパからシベリアの北部を迂回して東洋に向う北東航路と、ヨーロッパからアメリカ大陸の北部を経由してアジアに向う北西航路の開発に熱中していた。同時にスペイン・フランスと競合して北米大陸に植民地を求めることも、イギリスとして火急の緊要事であった。僧職にあっても、ハックルルートはこれらの事態に対し、せつかく学んだ地理学から帰結した対策を提示することを抑制できなかった。

1582年かれはイギリスの貿易を涵養し、国民の生活を向上せしめることを強調した処女論文「アメリカ開発にかんするさまざまな航海」*Divers Voyages touching the Discoverie of America* をソーン、Lock など地図数葉を副えて公にした。

その翌年1583年から88年に至る5年間、ハックルルートは駐仏イギリス大使、エドワード＝スタッフォード卿の大使館付牧師 chaplain としてパリに滞在した。イギリス・フランス間の国交が微妙であっただけに、大使の身边にも危険が漂い、公務の間隙を縫ってパリの図書館はじめ付近各地の航海文書の探索・収集にあたるハックルルートに、しばしば産業スパイなどの汚名が着せられ、緊張の日々がつづいた。

しかし、かれは、フランスにおいてこそ、イギリス以上に、航海文書、探検記録が適当な場所に保存され、より高い史料的价值が与えられていることを見逃さなかった。

大陸諸国相互間では貴重な文書が、陸続きの国外に流失するという危険さがある。しかし、島国イギリスでは故意に舶載して持ち出さない限り、稀覯文書の流失は防止できるはずである。それなのに、その安心感からか、かえって貴重文書が粗雑に扱われ、保存も万

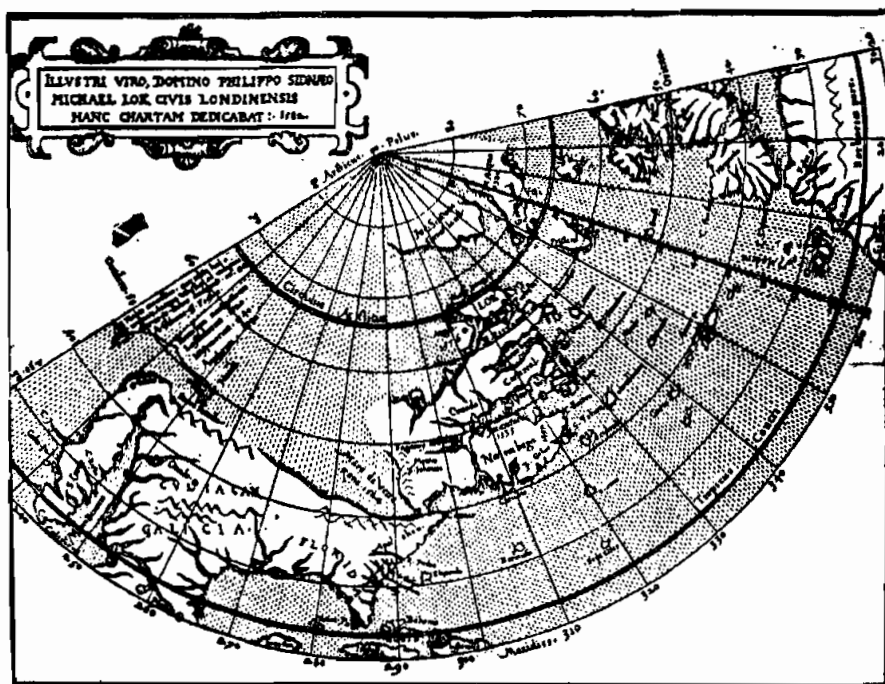


図3. ロックの地図

*From " Divers Voyages touching
the discoverie of America," by
Richard Hakluyt (1582)*

全でないことを、フランス滞在中、ハックルフトは深く思い知らされた。

フランスにあっても、母国イギリスの動静が気がかりだった。そこでは例の Sir Walter Raleigh の Virginia 植民計画が進行していた。ハックルフトはこの機会を逸しては、北米における植民活動が、フランス・スペインよりはるかに後れ、悔を千載に残すことを洞察した。1584年「西方植民にかんする意見書」The Discourse on the Western Planting を匿名で綴り、フランスから女王宛直送した。

これは、近世初期の政治地理学の古典といわれるみごとな論文であったが、このなかでかれは北米の北東部に植民地を建設し、そこで、従来イギリスが莫大な費用をかけて外国から輸入していた物資を自己生産すること、北海の然るべき島に中国との貿易の基地を求め中国への羊毛製品の流出口とする、いずれにしても、北極圏経由の北東航路の開発が急務であること、これを突破してイギリス人は大西洋の東西兩岸を活動舞台とすべきこと、当面の敵であるスペインの海上制覇を抑圧し、スペインがラプラタ川流域から財宝を積んでマゼラン海峡を通過する際にこれに攻撃を加えるべきことなどを強調した²⁵⁾。

たしかに傾聴すべき論文に相違なかったが、多少 radical な意見であることも事実であった。エリザベス女王もこれを読みはしたが、体よく wisely 拒絶し、ローリーの計画は実現しなかった。しかしこのあと数年でスペインの無敵艦隊 Armada (1588) をイギリス海軍が全滅させ、また1585～7年にかけての Virginia の植民は失敗に終わったが、ハックルフトの死後まもない1620年、例の清教徒の移住により、ニューイングランド植民地の基礎がつくられたことを思えば、この論文におけるハックルフトの素志は貫かれたと見るべきである。

4. 航海記の成立

1589年、かれがフランスから帰国1年後、過去20年の長期間、収集され累積され、丹念に整理された航海、探検、旅行文書が1巻の書物となって刊行された。語数からいえば約75万語、大判 (folio) の書物であったという。『既往1500年間のイギリス国民による主要な航海、旅行、交易および発見の記録』The Principal Navigations, Voiages, Traffiques and Discoveries of the English Nation...within the Compass of these 1500 Yeares., と題するこの書物は、イギリス国民はもちろん、世界のどのほかの国民もかつて見ることを得なかった貴重な資料集であった。

この書物が生れるについては、ハックルルートの非凡な才能、異常な愛国心、高い地理学的識見を必要としたことはもちろんであるが、飽かず倦まずこの地味な仕事にあたったかれの勤勉さ industriousこそがこの書物の原動力であったという。5年間のフランス滞在のほか、かれは一度も国外に出航しておらず、いわゆる書齋学者、安楽椅子によりかかった怠惰な地理学者 armchair geographer ではなかったかという酷評もあるが、いかに偉大な地理学者であっても、人の手をくぐらない first-hand の海事史料が、居ながらにして、その手許に飛びこんでくるわけではない。

「幾度かの眠れない夜、困難の日々、暑さ、寒さに私は耐えてきた。いかに多くの長い誹謗に満ちた旅行を私は続けたことであろう。有名な図書館は史料入手のために何回も訪問した。私は探し求めている文書のためなら、いかなる費用も惜しまなかった。」と彼自身史料探訪の旅の苦しさを語っているが、400年後、かれと同じような Field work が義務づけられているわれわれ地理学徒には、かれのこの述懐は頂門の一針であり、われわれの奮起を促がす強力な刺戟剤である。

こうしてできあがった『航海記』は、ハックルルートと同じ年、ハックルルートより7か月早く世を去ったシェクスピアの戯曲に匹敵するといわれる。Oxford の英文学者 Raleigh²⁶⁾ はシェクスピアのあと、イギリスには多くの詩人、劇作家が出たが、かれらは『航海記』の子どもであり、継承者でしかない。エリザベス朝のイギリスを知るためには、シェクスピアと『航海記』との両方を見なければならないとしている。

地理学者 Gilbert はもしエリザベス朝最大の人物をあげるとすれば、世界を周航してイギリス海軍の増強に貢献したドレーク、シェクスピア、それにこのハックルルート3人にしぼられるのは当然であるという。

合衆国の地理学者 Kish²⁷⁾ も、『航海記』は、探検および地理的発見の classic (最高級の作品) であり、ハックルルートは地理学史上最も偉大な記録家 Chronicler であったと激賞しているが、最近、岩波『大航海時代叢書』第Ⅱ期の1環として、『航海記』の一部分が翻訳、日の目を見ることは喜ばしい。

一時、ハックルルートを白眼視し、1587年かれがまだフランス滞在中にもかかわらず、ロンドンからやや僻遠の土地、奴隷貿易で悪名高い Bristol の司祭に左遷しようとした女王も、『航海記』完成後はその考えを変え、1600年、かれをウェストミンスターの大司教に任命、至近距離に置き、王室の海事顧問として寵用した。

その life work 『航海記』を世に送ったハックルルートは生活に1つの区切りがつき、1590年、ドレークに次ぐイギリスで第2番目の世界周航者 Cavendish の姪 Douglas と結婚した。名門 Howard 家の庇護を受け、幸福な結婚生活であったと思われるが、1597年妻の死に会い、その後、地理的な著作はほとんどない。Wetheringsett に居を構え、終生ここ



図4. ドレークの乗船

を居宅としたが、『航海記』のことだけは片時も頭から去ることはなかった。

1588年から1600年にかけて、さきの『航海記』初版の増訂版として、3巻本の『航海記』を出した。初版にもれていた多くの史料、ならびに初版以来入手した航海記数本を収録したもので、名家 Edward Wright が作製した大型地界地図が付録として添えられた²⁸⁾。

この増訂版が完成した1600年はイギリス東インド会社の設立年であるが、かれは乞われてこの会社の顧問に就任した。また、ほかのいくつかの開発会社の株主ともなり、最後まで北米開発を念願しつづけた。

この『航海記』の学問的価値については、すでに論じつくされている。とにかく克明に、主観を交えず、原本の香りを損なうことなく、一点一画正確に収録されたこの書物の史料価値は大きい。オドリコ、ルブルク、コロンブス、カボット、コルテス、マゼラン、カルチュ、ドレーク、カヴェンディッシュなどわが国にも知られている探検記、旅行記の源

泉はここに求められ、数多く収録されている偉大な航海者の書翰には、その歴史性のほかに、人間性の横溢が感じられる。たとえば、ドレークが母国にいたかつての僚友に送った手紙にはこの書翰が貴兄の手に届くかどうか危まれるので、ほかの友達にも同じ趣旨の書翰を送ったと記しているのはその一例である。日本については R. Willes によるかなり詳細な報告²⁹⁾があるが、これはわが国では用いられていない珍しい史料である。

地理学者、航海業者のみでなく、歴史家にとっても貴重な資料であり、たとえば Unwin は第一十字軍に先立つ数世紀間の遊牧民の交易状態を洞察するにあたり、ハックルwertは最良の資料を提示していると言い、また前述のようにイギリスの羊毛製品の市場として中国を想定していたハックルwertの卓見に敬意を表している³⁰⁾。

ローマ時代の歴史家タキタスを用いてロンドンがネロ皇帝の時代にすでに有名な市場町であり、またきわめて交通の盛んな町であることを記すなど、断片的ではあるが、興味ある史実がいっぱい盛り込まれている。

5. 『航海記』の影響

1616年11月23日、ハックルwertは齢64歳で世を去った³¹⁾が、かれの『航海記』は不死鳥のように生き残った。

かれが一生かけて収集した多くの文書は、とうていわずか3巻本の『航海記』に収録できなかった。かれが残したぼう大な史料は、のち Samuel Purchas の手に委ねられ、1625年 Purchas his Pilgrim という題名で出版された。学問的、良心的であったハックルwertに引きかえ、いくらか売名的であったパーチャスは、ハックルwertの作品を改悪したのではないかという批評もある。

貴重な文化財を個人の手へ委ねることの危険さは、パーチャスにその最悪のケースが求められる。組織の力で、ハックルwertの史料を保護しようという機運がハックルwertの母国イギリスで徐々に高まり、かれの死後230年を経た1846年12月、Royal Geographical Society (1830年創立) 全会員の協賛をえて、Hukluyt Society が設立された³²⁾。

ハックルwert協会発足当時、王立地理学協会の全会員がこの協会の会員を兼ねるという奇妙な運営方法がとられたが、経済的に行きつまずり、現在は両協会はそれぞれ独立的に運営されている³³⁾。

ハックルwert協会の目的とするところは、ハックルwertの意志を嗣いで、古今東西の世界史的な意味をもつ航海記・旅行記・地理書を選択・刊行することにある。既往130年間に貴重な書籍約200点が刊行され、日本関係では、三浦按釘の『日本の思い出³⁴⁾』や、セールの『日本渡航記』(村川堅固訳)などがある。

『航海記』にもれた多くの資料は、協会に所属する一線級地理学者の手によって整理され、編集され旧『航海記』を含む、新しい『航海書』12巻が1903～5年にグラスゴーで刊行された。これはハックルwertの全著作の完全な翻刻で、原本の文中の母音を現代風に訂正しただけである。これを通じて血のにじむような、ハックルwertの努力、その呼吸までがまざまざと感じとれる。

この12巻のうち、イギリスに関係深い航海記だけを精選して、1907年 Everyman's Library の8巻本(筆者蔵、ただし1962年再版)が刊行され、かなりひろく流通している。1927～8年、さきの Everyman's Library 版に外国人航海者・旅行家による記録2巻を加え、Dent's Illustrated Classics 10巻が刊行された。この叢書にはそれぞれの航海記と同時代の絵画³⁵⁾・肖像・船舶・地図類のカットが多数挿入され、見るからに楽しい書物となっ

ている。この10巻本は東京の古書肆で筆者が見出し、現在奈良大学蔵書となっている。

ハックルートの伝記評伝³⁶⁾は、相等数あり、一々列記しないが、筆者はわずかに、その2, 3を参照したにすぎず、本格的な研究にはまだ遠い距離を感じる。

む す び

以上、非力を顧ず、きわめて限られた資料によってハックルートに挑んだのは、わが国ではあまりにも、かれとその業績が軽んじられ、誤解されているためである。たとえば英文学史の最高権威とされている齋藤勇博士でさえ、その『イギリス文学史』のなかで、

「当時勃興した旅行熱は、Richard Hakluyt の *The Principal Navigations, Voyages, and Discoveries of the English Nation*, 及びその続篇とも見るべき、Samuel Purchas の *Purchas his Pilgrimage* (1613) 及び *Pilgrim* (1926) などを産んだ³⁷⁾」

と記されているが、これは全く逆であって、旅行熱がハックルートを誘発したのではない。ハックルートの『航海記』に刺戟されて、イギリスの海運や旅行が盛んになり、延いては大英帝国の設立につながったのである。東洋各地に来たイギリス東インド会社のあらゆる船舶が、船長室に『航海記』を舶載し、無言のうちに、『航海記』は上流船員たちの歴史ならびに航海教育に貢献した。イギリスでは作家も詩人も『航海記』によってインスピレーションを受けた、たとえば Daniel Defoe がロビンソン物語を草するにあたり、『航海記』を耽読したことは有名である³⁸⁾。なお、デフォーはある意味で最も忠実なハックルートの後継者である。数冊の商業論を著作してイギリスの商業の繁栄を一生の念願とし、また航海の歴史そのものではないが、これに関連の深い大型本700ページに上る『海賊の歴史』を書き、最近、とみにこの書物の学術的評価が高まってきた³⁹⁾。

日本で、ハックルートが無視されてきたことは地理学に携わる者にとって大きい悲しみである。この小文が、今後、わが国においてハックルート研究の端緒となれば、筆者の満足これにすぎるものはない。

注

1. 野間三郎、『地理学の歩み』、1970、p. 80の年表に1598—1600、リチャードハックルイト「主要航海集」の項がある。日本では従来ハックルイトと呼ばれたが、Daniel Jonesの発音辞典には *hæklut* とありハックルートあるいはハックルルトと呼ぶべきであろう。
2. Hakluyt, *Voyages*, Vol. 1, 以下ことわりのない場合は *Everyman's Library* 版を略記し、*Voyages* と呼ぶ。
3. J. K. Wright, *Human Nature in Geography*, 1966, p. 183.
4. 辻田右左男『日本近世の地理学』、1971、p. 279.
5. カボットはゼノア生れのイタリア人であったが、イギリス王の勅許をえて北米に向った。なお探検史は日本でもこれまで多数出ている。E. Heawood, *A History of Geographical Discovery*, 1912., P. Sykes, *A History of Exploration*, 1934の邦訳(それぞれ細井一六訳, 1929, 長沢和俊訳, 1973)もある。
6. R. V. Tooley, *Landmarks of Mapmaking*, 1968, p. 95.
7. Hawkinsは父子2代にわたる探検家、息子のJohnはイギリス最初の奴隷商人でもあった。クチンスキー著、上田正夫訳『植民地の人口』、1944、p. 161.
8. 辻田右左男「ユートピアと大航海時代」奈良大学紀要、第7号、1978.
9. Robert Thorne's *Declaration, Voyages*.
10. Janet Hampden, *Richard Hakluyt, Voyages & Documents*, 1965, Introduction, p. xii.

11. Hakluyt という語感から Dutch origin の説もあるが, Wales 故郷説が有力である。
12. E. G. R. Taylor, *Tudor Geography, 1485-1583*, 1930. p. 45 以下。
13. *Voyages*. Vol. 1. p. 27.
14. *Voyages*, Introduction by J. Masfield.
15. E. W. Gilbert, *Richard Hakluyt and His Oxford Predecessors*, 1967. in *British Pioneers in Geography*, p. 41. Roxby (1880-1947) は中国研究の専門家。
16. J. D. Wilson, *Life in Shakespeare's England*, 1954, p. 91.
17. *Voyages*, Vol. 1. p. 2.
18. *Ibid.*, Vol. 1. p. 1.
19. J. N. L. Baker, *Academic Geography in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*, 1935. in *the History of Geography*, p. 15.
20. カムデンのイギリス地誌の半世紀前に不完全な形であったが, リーランドの地誌が出ている。(大塚久雄著作集, 第5巻, p. 91)
21. G. M. Trevelyan, *English Social History*, (a Pelican Book), 1976, p. 1907. これに対する Cambridge では, Cecil 一家, Bacon 一家, 『航海記』の献辞の主 Walsingham が有名な学者だったという。
22. T. W. Freeman, *The Geographer's Craft*, 1967, p. 156. 同じことは, D. Stamp, *Longmans Dictionary of Geography*, 1965. にも記されている。教授ではなかったが, すでに Norton がハックルwert以前にオックスフォード大学で地理学を教えていたと Gilbert は言っている。
23. *Voyages*, Vol. 1. p. 3.
24. J. Bakeless, *The Eyes of Discovery*, 1961, p. 222.
25. G. R. Crone, *Background to Geography*, 1964. p. 31.
26. ローリーは1903年のハックルwert協会編『航海記』の編者である。
27. G. Kish (ed.), *A Source Book in Geography*, 1978, p. 328.
28. ライトの地図はメルカトル図法によるイギリス最初の地図, 前掲 Heawood, p. 11.
29. *Voyages*, Vol. 4, p. 191 以下。
30. George Unwin, *Studies in Economic History*, 1958, p. 244.
31. Westminster 寺院に葬られたといわれるが, 現在同寺院にかれの碑石はない。肖像画も全然残っていない。
32. Hakluyt Society, in *Encyclopaedia Americana*.
33. The Hakluyt Society, *Annual Report and Statement of Accounts for 1963*. この年の会員数 1,624 人で前年度より104人増, 評議員には日本でも有名な Boxer, Crone などが名を連ね, 地図学史の Skelton, 地理学史の Baker は副会長である。Hon. Secretaries の1人に Miss Campbell の名がある。筆者はこのうち3人と面識がある。
34. *Memorials of the Empire of Japan. (The Letters of Wim. Adams, 1611-1617)*. ハックルwertの存命中, イギリス人はすでに日本に来て, 1609年平戸に商館を開いた。
35. フランスの従軍画家 Thomas Derrick の画やパノラマ地図が20ほど挿入されている。
36. G. B. Parks, *Richard Hakluyt and the English Voyages*, 1928, J. A. Williamson, R. H. and his Successors, 1946, のほか, ハックルwert協会編, 『2人のR. H. の往復書翰集』などがとくに有名。
37. 斎藤勇, *イギリス文学史*, 1958, p. 149.
38. 辻田右左男「地理学者の条件—ダニエル=デフォーの場合」, 奈良大学紀要, 第5号, 1976.
39. Daniel Defoe, *A General History of the Pyrates*, 1724. この書物は刊行後200年間ほとんど人の注意をひかなかったが, 20世紀に至り数種の復刻版が出ている。筆者は1927-8年ハックルwert 10巻を出版した Dent 社刊 M. Schonhorn 編, 1972, pp. 717 を所持している。

付記 1980年9月中旬から病床にあり、原稿完成が遅延したことにより、編集委員の先生方に多大の御迷惑をおかけしたことをお詫びする。また病中、畏友室賀信夫博士から本稿執筆につき懇篤な激励を頂いたことを深謝し、奈良大学在任の最後の作品となる本稿を、未熟ながら室賀博士の足下に献じたい。1950年10月13日、深草にて記す。

Summary

In this paper, the author intended to clarify the life and work of Richard Hakluyt, who was strangely unfamiliar to Japanese readers. In fact, he was one of the most distinguished Elizabethan scholar, well comparable to Shakespear, the dramatist, in his excellent work 'Principal Navigations'.

The author firstly sketched his biography. He was born in London, studied at Oxford. By profession, he was clergyman or preacher of England Church. But he was the fervent follower of the geographical science. His interest and full energy were concentrated to collect the original records of sea-farers and explorers in past and in his age. By these assiduous work, he aimed the developing of the newly-founded North America by the British nation. So in the character, his geography was a colonial geography, or economic and political geography. He maintained also that the maps were indispensable to study geography. Concerning to the academic value of his life work 'Principal Navigations', of which first edition appeared in 1589, and the enlarged one was completed in 1598~1600 was discussed already by the many British geographers.

These books's influences were very great. Walter Raleigh, the Professor of English Literature at Oxford, once said: 'The dramatists and poets were the children and inheritors of the Voyages. For instance, Daniel Defoe, the author of Robinson Crusoe, got inspiration from 'Principal Navigations, and he himself wrote 'A General History of the Pyrates' in 1724.

Sofar, Japanese geographers paid little attention to Hakluyt and his works. By this paper, if someone of Japanese geographers might start studying of Hakluyt, the author will be much glad and content. The author hopes so eagerly.